

地域のちからコブ



“地域を元気にしてくれる方、魅力を高めている方、
伝統や芸能、産業を保全している方々の紹介冊子”



地域のちからコブ
2010.4～2012.3

足立区
生涯学習センター





足立区生涯学習センターでは、地域の活性化の一助にと、絆づくりのイベントやボランティア活動の場の創出などに取り組んでいます。その一つに生涯学習センターコミュニケーション情報紙「ピア・ナビ」での“地域のちからコブ”の特集があります。この“地域のちからコブ”は足立区において地域を元気にしている方々、地域の魅力を高めている方々、伝統や芸能、産業を保全している方々をご紹介しますことで、区民の皆様へ地域の活力を再発見していただくため、連載してきました。今回の冊子は2010年4月号の第1回から2012年3月号の第22回までをまとめています。

取材先は地域で活躍する団体やNPO、伝統工芸品を作りつづけている工場や工房、伝統芸能を未来に遺そうとしている人々、昔からの味を大切に守っていただけるお店のご主人、新しい事業を足立で立ち上げ活動の場を広げる企業など、いろいろな分野にわたっています。

拙い取材に根気よく応じて下さった方々に、この場をお借りして御礼申し上げ、今後のご活躍をお祈りいたします。

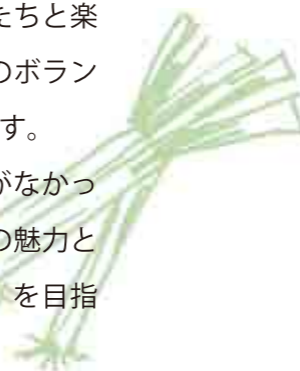
また、この22回掲載の途中、多くの被害を出した東日本大震災が起こり、その被災者支援のチャリティージャズコンサートに集まってくれた大学生もご紹介しています。他にも生涯学習センターの若者チャレンジ事業で講座を企画し、講師を務めた若者、ふれあい広場などで地域の子どもたちと楽しく遊び、学び、地域と絆を深めた高校生や大学生のボランティアも“地域のちからコブ”としてご紹介しています。

今までゆっくり「ピア・ナビ」をご覧になる機会がなかった方も、この一冊をお読みくださり、足立区の人々の魅力と地域の誇りを再認識し、新たな“地域のちからコブ”を目指す活力にしていいただければ幸いです。



地域のちからコブ INDEX

NPO 法人足立フォーラム 21・NPO 法人千住ウエスト 北島一弘さん	—	2
足立区千住三丁目町会 山崎次郎さん・安保幸輔さん	—	3
NPO 法人千住藝術村 加賀山耕一さん	—	4
(有) 美鈴屋三味線店 鈴木勇二さん・豊さん	—	5
(有) 大塚竹管楽器 大塚義政さん	—	6
加藤商店 加藤彰久さん	—	7
社会福祉法人リード・エー 葦の会作業所のみなさん	—	8
アトリエO 大淵澄夫さん	—	9
足立区生涯学習センター 若者チャレンジ事業講師ほか	—	10
足立区生涯学習センター ボランティアのみなさん	—	12
地域のちからコブ MAP	—	14
小野表具店 小野滋嗣さん・彰子さん	—	16
NPO 法人ぶらちなくらぶ 大竹恵美子さん	—	17
石黒のあめ 増田裕さん	—	18
カフェしゃべり場 森本麗子さん・田内千枝子さん	—	19
地元の高校生・大学生の皆さんほか	—	20
旭染工株式会社 阿部晴吉さん	—	21
足立区生涯学習センター ボランティアのみなさん	—	22
ファーストステップシューズ 町田彰秀さん・洋子さん	—	24
龍芳太極拳梅田 白川悠君・大竹雅大君・荒川イヨさん	—	25
獅子舞「ひよつとこ会」 大野さん・榊家さん・増田さん	—	26
葱商「葱茂」 安藤賢治さん・育子さん・将信さん	—	27
平井玩具製作所 平井英一さん	—	28



特集 ちからコブ 地域の ①

このページは地域を元気にしている方々、地域の魅力を高めている方々、伝統や芸能、産業を保全している方々をご紹介します。

これからの足立を支える 元気な子どもたちとともに 歩んでいきます。



北島 一弘さん

2月27日(土)生涯学習センター講堂で足立区小学生オセロ大会が開催されました。

低学年の部と高学年の部に分かれ、トーナメントの熱戦が繰り広げられました。地域のちからコブ第1回目はこのオセロ大会を主催されたNPO足立フォーラム21の専務理事、北島一弘さんにお話を伺いました。

北島さんの地域での活動は23年前、子供会の会長を務められたことに始まり、町内会での青少年部長等の職務にあたる一方で、第五地区対選出の青少年委員(千寿青葉中担当)として、千住地区の学校再編や千寿双葉小の改築に関わりながら、地域の取りまとめや小学校に地域連携施設を導入するといった事業に取り組まれてきました。

さらに、平成14年に導入された小中学校の週5日制実施の際に、空いた土曜日を活用したサタデースクール事業を提案し導入しました。英語・数学・漢字の検定塾、オセロや囲碁、将棋の文化塾がそこで開校されました。現在では当時生徒だった高校生や大学生が教える側としてボランティア参加する教育的なサイクルができあがるなど、教育的に有意義な事業となっています。



毎年荒川虹の広場で行われる「足立凧まつり」



伝統文化子ども教室の華道教室と茶道教室



生涯学習センター講堂で開催された「足立区小学生オセロ大会」

NPO団体としての活動

北島さんは、さらに2つのNPO法人の創設や活動にも携われています。

そのひとつがNPO法人足立フォーラム21です。毎年10月の第一土曜日に荒川土手で参加者、ボランティア3,000人が参加して開催される『足立凧まつり』をはじめ、冒頭で紹介しました小学生オセロ大会、4月の千本桜まつりの開催など、地域の特性を生かした区民交流イベントを開催されています。

また、千住地区総合型地域クラブ・NPO法人千住ウエストでは、小中学校を会場として、ミニサッカー、アクアエクササイズ、卓球などの生涯スポーツ、伝統文化子ども教室などの生涯学習など総合的な学びの場を提供されています。

このように、こちらがお身体のことを心配してしまう程に様々な地域活動に取り組んでこられた北島さんですが、最後に『私どもの地域は、お住まいの皆様とのつながりも深く、新しくお住まいになる方にも開放的で、自然にひとつになれる住みやすく、活動がしやすいところです』とこやかに語られたお言葉が、長年の地域活動の実績と自信を窺うことができたようで、大変印象的でした。

特集 ちからコブ 地域の ②

このページは地域を元気にしている方々、地域の魅力を高めている方々、伝統や芸能、産業を保全している方々をご紹介します。

灯籠流しと音楽会を通して 家族をはじめ 地域の絆を強めていきたい。



千住3丁目町会にて
左：山崎次郎会長、右：安保幸輔さん

今回取材に応じてくださったのは、千住3丁目町会の山崎次郎会長と安保幸輔さんです。今年で8目を迎える「灯籠流しと音楽会」は、2002年に歌手の山村貴子さんが「ここ足立で眠っている恩師のそばで何がしたい」と発案したことから始まりました。その話が区の職員から山崎さんのところに届き、実現に向けて動き出しました。被爆2世の山村さんが地元広島で灯籠流しのイベントを行っていたこともあり、荒川での「灯籠流しと音楽会」が企画されました。イベントが始まった当初は協力者も少なく、暗い中での後片付けは大変だったそうです。今では10名~15名からなる実行委員会、ボランティアや町会(千住本町五町会)など200名を超える多くの方がこのイベントを支えています。



灯籠を流す山村貴子さん



開会あいさつ
山崎次郎実行委員長



会場設営も皆で協力して
行っています。



灯籠の組立は会場だけでなく
小学校などでも行われました。



駅前で宣伝する
ボランティアの方々

このイベントは、初春に地域のボランティア団体が荒川に自生する立ち枯れたオギの刈り取りをするところから始まります。これが灯籠の骨組みになります。土台は地元の八百屋さんを通じて青果市場からもらってくる発砲スチロール、加工しやすく川を汚しません。願いを込めて描き流された灯籠は、下流で回収。燃える材料は2丁目の勝専寺のご住職にお焚き上げしてもらい、発砲スチロールは足立市場でリサイクルに出してもらっているそうです。人にも川にも優しくとてもエコで、心のぬくもりを感じるイベントです。多くの方々に灯籠流しや音楽を通じて、命の尊さや平和の大切さを感じていただくとともに、心のぬくもりが家族や地域のつながりを深めていくことにつながれば、より一層住みやすい足立になっていくことでしょう。

また、このイベントは参加する子どもたちに、荒川が人工の川であることや掘削するとき犠牲になった多くの人たちがいたことを知ってもらう良い機会になっています。資金や当事者の高齢化などいろいろな課題がありますが、荒川を彩る風物詩として、また人々の心に暖かいともし火をともし機会として末永く継続して行って下さい。

このページは地域を元気にしている方々、地域の魅力を高めている方々、伝統や芸能、産業を保全している方々をご紹介します。

「この街を全国に知られる芸術の街に」という大きな夢を若き芸術家、住民の方とともに千住という大きなキャンバスに描いています。



NPO 法人 千住藝術村 代表
加賀山耕一さん

墨堤通りから千住緑町ゆうやけ通り商店街に入っ
てすぐ、新しくできたオープンギャラリー&アトリ
エで行われている「藝大生の真実」展の会場で、商
店街と学生と一緒に千住を元気にしようと頑
張っている NPO 法人 千住藝術村の代表 加賀山耕一
さんにお話を伺いました。（「藝大生に真実」展関連
の記事は7ページに掲載しています）

この活動を始めたきっかけは、平成 18 年、千住に
東京藝術大学千住キャンパスが開校し文筆家でもあ
る加賀山さんが取材にあたったことによります。も
ともと千住緑町生まれで6歳までここで暮らした加
賀山さんは、「子どものころ元気だった商店街が、店
の数が減り、利用者も減って寂しくなった様子を見
てなんとかできないか」と、学生の芸術活動と商店
街をつなぐことで街に活気を取り戻そうと考えたそ
うです。平成 20 年、NPO 法人 千住藝術村を立ち上
げました。まず商店街の空き店舗と学生をつなげ、
「おっとり舎」と名づけられたスペースでのアート活
動を後押ししました。当初は住民の方からあやしい
団体か不信の目で見られていましたが、講談会や
ごぜ歌の演奏など、学生たちとのコラボレーショ
ンを通じて地域の理解を徐々に得てきたとか。昨年7
月には「おっとり舎」の近く、閉店した肉屋さんの
店舗の2階にアトリエとギャラリーを兼ねた「スズ
ロハコ」をオープン、芸大生4人が創作活動を続け
ています。今回の取材はこの「スズロハコ」
階下（1階）で行いました。

NPO 法人 千住藝術村の主な活動、プロジェクト
7は、足立区をはじめ地域の商店街有志と協働を心
がけています。例えば、学生アーティストが制作する
フリーマガジン「芸術村のえほん」は、地元商店か
らの寄付等で発行され、いっぽう9月の千住神社の
宵宮祭では、学生たちが似顔絵描きやストラップづ
くりで商店街の活性化に協力。また、商店街の空き
店舗を1カ月にわたり"商店街立美術館"に変身さ
せるほか、千住の街全体を美術館に見立て、20カ所
程の協賛店のショーウィンドに学生や地元アーティ
ストの作品を展示しました。今年もさらに内容を充
実させ、区外からも新たな層のお客様を千住の街に
導きたいそうです。このほか現在、千住の街路灯に
掲げられている「帝京科学大学歓迎フラッグ」や「足
立区内共通プレミアム商品券」の斬新なデザイン制
作をコーディネートするなど、足立区のイメージア
ップにつながる活動にも取り組んでいます。

今後は「千住を全国に知られる芸術の街にするた
め、現在3ヶ所の拠点をもっと増やしたい」との
こと。「そのために商店という点、商店街という線
をつなぐ面としての町おこしを、学生たちと楽し
く続けていきたい」と加賀山さんは語っていました。

取材をしているあいだ、車に乗ったおじさんや買
い物袋を提げたおばさん、学校帰りの小学生らがガ
ラリー内を覗いたり、声をかけていきました。地域
にしっかり根を下ろし、住民に親しまれている千住
藝術村でした。これからも商店街の皆様と学生とと
もに大きな夢を描き続けて下さい。



学生のデザインした
足立区内共通プレミアム商品券



学生が自ら制作発行している
「芸術村のえほん」(次号制作中)



千住まちかど美術館
店のショーウィンドに絵画



千住まちかど美術館
商店街私道の路上アート

このページは地域を元気にしている方々、地域の魅力を高めている方々、伝統や芸能、産業を保全している方々をご紹介します。

受け継がれる、三味の音色に大衆文化が支えられ。



美鈴屋三味線店
ご主人鈴木勇二さん(左)と豊さん(右)

今回の地域のちからコブは、伝統楽器の三味線づ
くりをされている、美鈴屋三味線店のご主人、鈴木
勇二さんと三男の豊さんにお話を伺いました。足立
区青井で 30 年間三味線を作り続けています。鈴木勇
二さんの先代は西新井でお店を開いていたとか。お
店に入ると商品の並んだ店舗と仕事場がいつしよに
なっていて、お二人が並んで三味線づくりをされて
いました。美鈴屋さんでは民謡用の三味線や津軽三
味線の製作をしています。

民謡三味線は声の調子に合わせて棹の長さを注文
するなど、オーダーメイドの楽器でもあります。また、
その形はお店によって個性があり、美鈴屋さんでは
天神(糸倉)と、棹と胴の接合部の形などが他とは
違うとのこと。形と音色を気に入ったお客様は
遠方からもいらっしゃいます。

そんな日本独特の楽器ですが、材料のほとんどは
海外からの輸入品です。棹や天神などは紅木を使
います。比重があって大変硬い木でインドなどから輸
入しています。磨くと大変美しい様子が現れます。
ただその硬さのせいで、砥石の方がどんどん削られ
てしまうそうです。胴は花梨の木を使っています。
こちら東南アジアからの輸入です。

三味線の皮は、ご長男がやっている越谷店で張っ
ているそうです。昔は三毛猫の皮などと言われてい
ましたが、入手が難しく、最近は犬や合成皮が多く
使われるそうです。変わったところではカンガルー
なども使われるとか。

また三味線をつくる道具も貴重で、^{かん}匏も三つに分
かれる棹を削るため、刃の装着や形は独特です。こ
れらをつくる職人さんも少なく、自分たちで工夫を
しながら改良使っています。

三味線の値段は平均 25 万円前後とのことですが、
最後に車1台が買えそうな津軽三味線を見せていた
だきました。天神の上の部分と胴の部分に色漆で模
様が描かれており、大変美しいものです。ご主人に
つま弾いていただきましたが、低音のビーンと響く
素晴らしい音色でした。

お店近くの中央本町地域学習センターをはじめ、
各学習センターでも生涯学習としての三味線の演奏
活動は盛んです。その音色を守り継承していく3人
のお子さんがいらっしゃる、ご主人は心強いことと
思います。三味線職人は10年で一人前とか。息子の
豊さんはご主人に弟子入りして4年。まだ修行が続
きますが、日本の伝統楽器である三味線づくりを若
い力で引き継いで行ってください。

(有) 美鈴屋三味線店 本店
〒120-0012 足立区青井町 1-18-10 TEL 03-3849-2070
越谷店
〒343-0806 越谷市宮本町 1-166 TEL 048-965-1767

足立区生涯学習センターでは7月10日に山本竹勇氏
による津軽三味線の演奏があります。6月1日か
らの受付です。ぜひご参加ください。



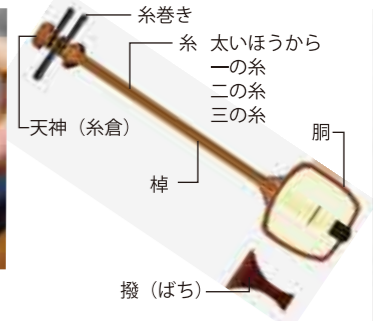
大変高価な津軽三味線、
ご主人につま弾いて頂きました。



花梨からつくられた胴、
昔は桑も使われていました。



刃のつき方や角度が独特の
匏(かん)。



このページは地域を元気にしている方々、地域の魅力を高めている方々、伝統や芸能、産業を保全している方々をご紹介します。

祭り好きの足立っ子に いつまでも心に残る 笛の音を。



篠笛に囲まれて作業する
(有) 大塚竹管楽器の大塚義政さん

地域のちからコブ⑤は足立で伝統楽器の篠笛製作をされている、(有) 大塚竹管楽器の大塚義政氏のお仕事ぶりをご紹介します。大塚さんは祭り笛の流派、初代獅子田流笛師中村甚五郎から数えて3代目。台東区蔵前にあった製作所は戦後、千住の龍田町に移り、平成元年に大塚竹管楽器とし「竹峰」を名乗られています。平成4年に西新井に移転、平成17年に入谷工房をつくり、篠笛作りを続けられています。

篠笛の製作は、「竹溪」の作名の息子の敦さんをはじめ、ご家族4人それぞれの部屋で分担、家の中を1周すると笛が完成する仕組みになっていると微笑みながら話されていました。

篠笛の材料の篠竹は、伊豆半島の先端や四国、山陽などでとれます。以前は虫取り網の柄などにも使われていましたが、需要が少なくなり、バブルのころはなかなか入手が困難な時があったとか。実際の篠笛の竹は湿度によって径方向に膨張するので、安定するまで3年以上寝かせます。太さ、長さで揃えられた竹の中側を本漆や合成漆で塗ります。細い竹の中をどのようにして塗るのかお聞きしましたが、これは企業秘密で教えられないとのことでした。

笛の保護と装飾のため籐を細く引いたものを巻きつけたりします。これを作る人は国内では少なくなり、タイやインドネシアから輸入しています。技術も向こうに渡ってしまったと残念そうでした。

指で押さえる孔は6穴と7穴があり、地域によって違います。東京は7穴、新潟は6穴、また獅子舞の演奏などは6穴が多いそうです。音の最後の微調整は、この穴の大きさなどでします。また三味線などと

違い調音が出来ないので、笛の長さを変えて対応します。民謡の声に合わせるため何種類も用意することもあるそうです。

笛の値段は1万円ぐらいのものが一般的です。また、黒漆に蒔絵を施したもの、神輿職人が作った金具をつけたもの、龍のスジ彫り仕上げや燻して渋い味を出したものなど、工夫を凝らした4~5万円ぐらいの笛もあります。特に白漆に龍の蒔絵を施した笛はなんとも上品で、美しいものでした。

笛は神輿屋、太鼓屋、楽器店などで販売されていますが、大塚竹管楽器としてのネットショップで購入も出来ます。若い人だけでなく、ご年配の方もご購入されるそうです。

笛は大事に使えば50年以上はもち、大塚さんのところには昭和20年や30年ごろ作られた笛の修理などの依頼もあります。新しく買った方が安い場合もありますが、長年大事に使った笛への愛着が感じられます。最近では他の楽器とのコラボレーションのため、ドレミ調音もあり、篠笛の活躍の場が広がってきています。

足立には祭囃子の保存会など多く、笛の演奏も盛んです。「子供たちが地域の祭りや祭囃子保存会などで親しんだ笛の音を、大人になっても楽しんでほしいですね」と大塚さんはおっしゃっていました。

(有) 大塚竹管楽器 入谷工房
〒121-0836 東京都足立区入谷 7-16-2
Tel. 03-3856-6890 Fax. 03-3856-6892
URL: <http://www.fueya.com/>



調音のため笛の長さはいろいろあります。



本漆に蒔絵の龍を施した篠笛(上)、頭に雲の模様の金具を施した篠笛(下)



彫師による龍のスジ彫りで本漆の埋め込み(上)、白漆に龍の蒔絵を施した篠笛(下)



籐を細く引いたもの、黒いものは染料で染めています。

まめに、まめに。 こだわり続ける豆の味と千住に漂う いり豆の香り。



加藤商店ご主人 加藤 彰久さん

「手むきの落花生(渋皮つきのピーナッツ)は機械むきの豆とは、色もつやもぜんぜん違うんだよ。」とご主人。並べられた2種類の豆を比べてみて、その色と艶の違いにおどろいた。手むきはつやつやしていて、色もきれい!なんといっても渋皮のカサカサした感じが全くないのだ。

そんなこだわりを持ったいり豆屋「加藤商店」は千住中居町の商店街の一角にある。昭和の初期を思わせる店構えと陳列ケースに、どこか懐かしさを感じるのには私だけではないだろう。そこには「落花生」「バターピーナッツ」「ソラマメ」「塩豆」「黒大豆」など...おいしそうなお顔がずらりと並ぶ。

お店の創業は昭和5年。千住3丁目でお店を構えたが、戦争で今の千住中居町に移ってきたそうだ。父親が始めたいり豆屋を受け継いで80年。「食べるお客さんの身になってつくんだよ。」受け継がれてきたこだわりがご主人から静かに伝わってくる。

「うちでは豆を選別してそれを炒るけど、そんな店ほとんどないよ。」選別することで、51kgの豆が49~46kgに減ってしまう。それでも良い豆をお客様に食べていただきたい、というご主人の思いからだ。こだわりはそれだけではない。天候次第で豆の収穫量や質が大きく変わる商売、質の良い豆を手に入れるために長年培われた天候や産地に関する知識には舌を巻くほどである。

いり豆の仕事と一口にいても、豆を炒るまでの作業はかなりの重労働だ。一度に30キロの豆を水に

浸し、膨らんでくる豆の水を何度も取り替える。そのあと手作業で豆の選別。さらにその豆をふかして、そこからいり豆機で炒る。いり豆機はガスバーナーを使うため40度の暑さのなかでの作業。都内には300軒の同業者がいたが、今では70軒に減り、そのなかでも自分たちで豆を炒って販売するお店は10軒くらいに減ったそうだ。

奥様からは「大変な商売だし、もう体も無理がきかない。」ご主人からは「最近ではコンビニの豆の味に慣れてしまって、本物の味のわかる人がいない。音感も悪くても味覚が悪いんだよね。ずいぶんといってお客さんも減ったし、商店会も昔からある店は4軒ほどになってしまった。」という話もあった。

時代の流れとともに、千住の町人もずいぶん様変わりしてきた。その移り変わりの中でも、いり豆へのこだわりとその豆を喜んでくれるお客さんへの想いは、しっかりと息子さんに受け継がれ、生まれ育った愛着のある千住からその魅力を静かに発信している「地域のちからコブ」を強く感じた。

取材を終えて帰る頃「おい、戸を閉めてクーラーを入れろ。」とご主人が奥さんに言った。「気温が25度以上になると、お客さんのためではなく豆のためにクーラーを入れるんですよ。」と笑うご夫婦の笑顔が素敵だった。

加藤商店
〒120-0035 足立区千住中居町 19-8 TEL 03-3881-2934



昭和22年頃つくられた桜の木のケースに入った塩豆。その白さは、塩と牡蠣殻の粉末をまぜて作られるそうだ。昔、隅田川ではたくさんの牡蠣が採れ、それを粉にするための石臼が胡録神社(汐入)にのこっていたらしい。



千住中居町に移ってきた当時から60年間使い続けている。豆を炒るときに出るすすで機械も天井も真っ黒だ。「車と一緒に毎日使うから壊れないんだよ」とご主人。



天真爛漫の笑顔と土の匂い、花の香り 足立の“イケテル作業所”から発信！



リード・エーの花屋
「りいどおるがん」の招き猫。
人も仕事もウエルカム。

竹の塚駅から地図を片手に歩いて15分。静かな住宅地の中に作業所があった。

入口の花壇に腰かけていた一人のメンバーが「こんにちは」と素敵な笑顔で迎えてくれる。午後からの畑作業に出かける時間とあって、建物の前にメンバーが次々と集まってくる。皆とても明るくて、笑顔が素敵！きれいな花とその笑顔に囲まれて、私たちが元気をもらっている気がした。

「社会福祉法人リード・エー 葦の会作業所」はメンバーが27名。子ども会に障がいを持った子どもが参加した事から始まった活動は、ゼロから始まり多くの人たちが関わってきた。ここでは20年以上も農作業を中心に仕事をしている。他にも公園清掃や花壇の管理、剪定、ポスティング、木箱づくりや封入れ作業など、様々な仕事を行っているが、農作業を中心とする作業所は23区でも珍しいそうだ。

「リード・エー」の名前は「葦 (Read) の会 (Association)」からつけられたとのこと。

「メンバーも職員もみんな一緒に働く社会人の仲間同士。」と職員の池田さん。その話のとおり入口にタイムカードがある。多くの作業所が15時終了という中で、ここは9時～16時45分までしっかりと働く。

受託した仕事のほかに、花売りや給食当番、片付け、清掃なども仕事として役割分担しておこなう。毎朝行われる役割分担の発表は、みんなワクワクドキドキしながら楽しみにしている瞬間だ。

職員の地道な努力と営業力で受託した仕事が、景気悪化の影響を受けて減っているために、全国的にかなり高いレベルにあったお給料（工賃）も少なくなってきたという。そんな切実な話を聞いて不況の影響を実感したのもつかの間。「何でもいいから、お仕事くださいねっ！」ととびっきりの笑顔で突っ込みが入る。その奥にメンバーや作業所に対する深い思いを垣間見た気がする。

地域とのふれあいも日常的な光景だ。畑の行き帰りには地域の方から声がかかり交流が始まる。それだけではない。「地域の中で」というみんなの想いは、いきいきルーム（2・3階）でのカルチャー教室の開催となって実現している。ここでは近所の方が集まり、メンバーと一緒に水彩画や陶芸、さをり織りなど楽しい時間をすごしている。作業所が地域の素敵なコミュニティスペースとしてイキイキしている様子が伝わってくる。

「エピソードはありますか？」「ウー、何とも難しい質問ですね。日々エピソードがありすぎて～！みんなとても楽しく個性が豊かな方ばかり。全てが楽しく、面白いですよ。」とメンバーにも負けない笑顔で池田さんは言う。

足立の地で地道に活動してきた歴史とその重みを感じるとともに、これからの活動がとても楽しみな“地域の力こぶ”でした。



昨年7月に移転、開所した施設だけにとても明るくて綺麗な建物だ。以前は材木置き場をリフォームした施設で、夏はとても暑くて冬はとても寒いと言う厳しい環境だったとか。



「りいどおるがん（花屋）」道路に面した建物の一角にあり、畑で大切に育てられた様々な花やハーブの苗が売られている。



室内で行われる高級農作物を入れる箱づくりや屋外での土や堆肥づくり、水やり、草取り、ポットの土入れ、肥料を丸める作業、苗の位置を変える作業などたくさんの作業があるため、みんなが何らかの形で関われる。



このページは地域を元気にしている方々、地域の魅力を高めている方々、伝統や芸能、産業を保全している方々をご紹介します。

足立の町はヒューマンスケール。 多くの商店街、銭湯や小さな路地がある。 人の温もりや優しさが伝わってきます。



足立素描展の会場にて
建築画家 大淵 澄夫さん

6月に足立区役所1Fアトリウムで開催された「建築画家大淵澄夫の足立素描展」におじゃましました。2008年4月から2年間公社ニュース「ときめき」に掲載された「足立素描」など約30点の水彩画が展示されていました。会場ですぐ目につくのが、かつて足立のランドマーク的存在だった、お化け煙突のモノクロームイラストと東京スカイツリーのカラーイラスト。新旧の風景が並んでお客様を迎えていました。大淵さんは、初日の慌ただしさの中、にこやかに迎えて下さいました。

「2年間で掲載されたのは24点ですが、実際には50点近く描いています。」と大淵さん。地区やテーマが重ならないよう、自転車で区内外を走り回ったとのこと。自転車のスピードと目線の高さが、ロケーション選びにちょうどいいそうです。「作品は40分ぐらいで現場で仕上げます。彩色は現場やアトリエでしています。景色によって鉛筆、フェルトペンと使い分けています。」絵を見た方は、「見慣れた風景でもこんな見方があったのか。」と、新鮮に感じ、風景を再発見されるようです。

今回の出展の足立の景観での一押しは、隅田川に残った造船所と、昔の風景を今も残す圀川だとか。区外ですが岩淵の赤水門も建造物として大変貴重なものだそうです。



隅田川の造船所（千住曙町）

もともと建築デザイナーであり、建築画はデザインのプレゼンテーションのために描いていた大淵さん。「50代からは建築画に専念しています。」

足立区に暮らすようになって7年。足立の魅力をお聞きすると、新旧のミックスの面白さ、対比の妙だそうです。「たとえば西新井のマンション群と千住の路地や商店街。この対比がお互いをいきいきとさせている。すべてが同じ様な建物になってしまっはつまらない。」また「だからこそ、失われていく建物や景観を絵という形で次世代に残していきたい。」

会場でお化け煙突と東京スカイツリーが並んでいたのはこういうことだったのですね。残念ながらお化け煙突は今ではなくなりましたが。

「圀川の風景など残ってほしいですね。」「これからは商店街と銭湯を描きたい。足立ほどそれらが多くあるところはないから。」足立はヒューマンスケールの町だとか。狭い路地があったり、高層住宅が少なく空が広い。人々の温もりや優しさがそのまま伝わってくる町。

これからも足立を再発見する美しい町の絵で、足立の魅力を発信し続けて下さい。



「お化け煙突は写真をお借りして描いている。東京スカイツリーは東京タワーのように、時代を象徴する建造物になっている気がする」と大淵さん。

旧岩淵水門（北区）



圀川の水車のある公園（六木）

今回の地域のちからコブは足立区生涯学習センターで
足立区生涯学習センターでは仕事体験、インターンシップ、若者チャレ

中学生職場体験

9月3日金曜日、足立区立第十一中学校の4人の生徒さんに、当センターのコンピュータ学習室や講座の受付、パソコンでの事務処理、防災センターでの仕事などいろいろな職場体験をしていただきました。

体験日誌
今回の職場体験は、私たちが過ごす日常は、誰かの助けによって成り立っているということについて考えるためのものです。今日一日働くことで、働くことの大切さがよくわかりました。私が社会人になったとき、今日のことがいかせれば良いと思いました。

小島 奈津季さん



体験日誌
今日はとっても良い体験が出来ました。初めてやった受付の仕事や手続き、パソコンの仕事などやりました。やった事のない経験ができて良かったです。この経験を将来に生かしていけたらなと思いました。

宮沢 友梨さん

体験日誌
今日はたくさん生涯学習センターの仕事内容がわかりました。最初は全然仕事内容もあまりわからなかったし不安だったんですが、一つ一つ見学場所も説明していただいたおかげで、いろいろとわかりました。

竹部 桃香さん

体験日誌
私は今日、生涯学習センターにこれって本当によかったです。すごくたくさんの事を学べてとてもいい一日になりました。この経験を明日からの学校生活で生かしていきたいと思います。本日は本当にありがとうございました。

平間 彩夏さん

若者チャレンジ事業

中国語講座、韓国語講座、レクリエーション講座、子ども向け英会話と、若者たちが企画し自ら講師を務める、講師と参加者がともに学び、資質を高める講座です。今年度2回目の韓国語講座を企画する康さんと、今回初めてサブ講師を務める李さんに抱負を語っていただきました。

康 大玉(カン・デオク)氏 獨協大学3年生
韓国語の先生になってみたくて、「若者チャレンジ」で講師をさせていただきました。3ヶ月間の韓国語講座は毎回私を新鮮にさせてくれました。受講生は大体40~50代の方が多かったです。皆さんお仕事に疲れているにも関わらず、授業が始まると目をキラキラとしながら私の話に注目してくれました。年をかさねても学べることをやめない!、年下の者からも学ぼうとしている皆さんを拝見させていただきながら、私もいくつになっても誰にでも学べる人になりたいと思いました。11月から始まる新しい韓国語講座も受講生の韓国語実力アップだけではなく、私自身の人間としての成長も楽しみです。若者の皆さんもぜひこのプログラムに参加してみてください。学校では学べられない大事なことを発見するかもしれません。



康 大玉氏



李 秀永氏

李 秀永(イ・スヨン)氏 明治大学2年生
アンニョンハッセヨ!
今回、韓国語講座のサブ講師を担当させていただきました。ソウル出身の李秀永(イ・スヨン)と申します。突然ですが、皆様は「인연」(インニョン)という韓国語の意味をご存知ですか。【ヒント】この「인연」によって人は、楽しくなり、成長をします。また、韓流ドラマでもよく出る単語です。答えは人々との出会い、結ばれる人間関係を意味する単語です。私達と韓国語の講座を通して楽しい「인연」を作ってみませんか。講座では韓国語の基礎をしっかり身につけさせて頂きたい、ちょっと汗をかいていただくかもしれません。この一苦勞を乗り越えていただくと、韓国そのものを楽しめます。お正月伝統料理を作って食べたり、本場で活用できるダイアログも設けてあります。どうぞ皆様と一緒に韓国を学びましょう。

仕事体験や講座の企画・運営で活躍する若いちからコブをご紹介します。
ンジ事業を通して若者の生き方、働き方を支援しています。

インターンシップ事業

この夏、生涯学習センターは2人の大学生をインターンシップ生として迎えました。8月3日~11日に川村学園女子大学の3年内田奈那さん。8月24日~9月6日に獨協大学3年の江口太陽さん。生涯学習センターでいろいろ仕事体験してもらい、最後に講座の企画を立てていただきました。若者チャレンジで企画を実現させて下さい。

内田 奈那さん(川村学園女子大学3年)体験日誌
4日間と短期間でしたが足立区生涯学習センターでのインターンシップは実になるものでした。中学生との交流、統計調査をさせていただきました。今後の大学生活や就職後もこれらの経験を活かしていきたいと思います。



プロに学ぶ番組づくりで講座の記録を撮影



講座スナップでユニークなアングル(内田さん撮影)



ゴスペル講座の受付・案内



グリーンカーテン事業に参加



講座記録用の写真の撮り方や講座企画など説明を受ける

江口太陽さん(獨協大学2年)体験日誌
職業体験を通じて、私は今まで学生として受動的な立場でしたが、社会人になることは、自分から仕事を求めていくこと、言動・行動に責任が求められることを学びました。また、新しい企画を考える創造的な仕事の面白さや、講座の補佐をして、参加者の楽しんでいる姿が直に見られるという現場で働く面白さを知ることができました。講師やセンターの方の姿勢から学ぶことは多く、この経験を今後の学生生活・人生に活かしていきたいです。

おかえり教室事業

サロン形式のおかえり教室の講師にも若い力が活躍しています。毎月誌上で連載しているレク・ネタ紹介コーナーの小西克典(地域学習センター職員)も若者チャレンジ出身です。レク教室を通じ、地域コミュニティにつながる活動を盛んにしたいという想いで実施をしています。この紙面で今月のレクリエーションをご紹介します。



若者チャレンジで講座企画・講師に挑戦しようと考えている君、下記までお問合せ下さい。
電話:03-5813-3730 FAX:03-3870-8407 Eメール:gs@kousya.jp 担当:鈴木、鳥塚までお気軽に!

9月のレクリエーション倶楽部から

レク・ネタ紹介コーナー

「喜怒哀読」

いたってシンプルなレクリエーションネタです。前もって用意した原稿を読み上げるのですが、別に指示を出す人が、「喜」、「怒」、「哀」のカードで読み手に読み方の指示を出します。読みあげる人はちょっと勇気がいりますが、表現力がアップするかもしれません。簡単なレク・ネタでしたが教室は大いに盛り上がりました。おかえり教室「レクリエーション倶楽部」は毎月1回。第1金曜日の午後6時半から開催しています。何かの集いや仲間づくりなど、その場を盛り上げるレク・ネタはコミュニケーションの潤滑油になります。ぜひご参加ください。予約は要りません。当日、生涯学習センターへお越し下さい。

今回の地域のちからコブはあだちサークルフェア 2010 を影で支えてくれたボランティアの活躍を写真でご紹介します。

参加団体のボランティア

サークルフェア2010参加団体の皆さんには、実行委員として、フェアの運営にご協力をいただきました。会場に飾るお花づくりや受付、ギャラリー、会場でのチラシやプログラム配りでパワーを発揮して下さいました。



大学生・高校生・中学生のボランティア

若者チャレンジでの講師やインターンシップで職場体験した大学生は、ぬいぐるみを着てのチラシ配りや、1円玉アート、抽選会場の受付などお手伝いいただきました。夏休みの講座に出席した中学生は、プラダンづくりに参加しお客様に作り方などの指導役を務めてくれました。さらにキラキラキーホルダーづくりのNPO法人キッズドアの高校生スタッフやお買い物ゲームの未来大学の皆さんの若い力が会場を盛り上げていました。



団塊世代のボランティア

足立FM開局準備会との共同で、ミニFM放送を担当して下さいましたのは「団塊綾瀬ネットワークだんだん」の皆さんです。当初はミニFMラジオ放送にとまどいがありましたが事例視察やリハーサルを通して団塊世代の実力を発揮!当日会場では来館者をまきこんで大活躍でした。



▲「だんだんミニFM放送ながいみちのりてんまつき」
(「だんだん」制作)より

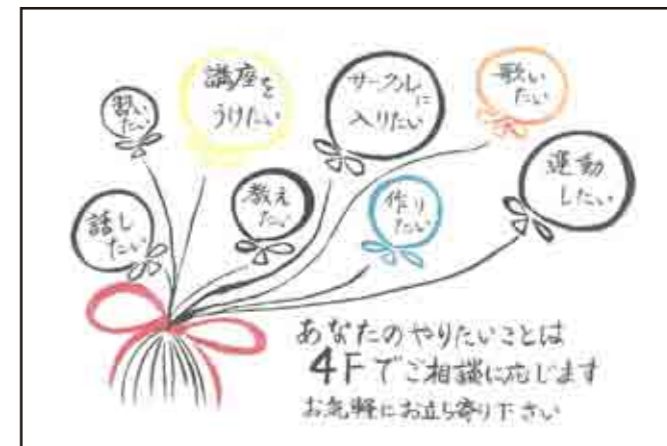
ITサロン運営ボランティア

サークルフェアの2日間、コンピュータ学習室で行われたプリクラづくりは、子どもたちに大好評でした。パソコンなど準備が大変でしたが、子どもたちにも人気で大盛況となりました。



学習情報サポーター

ボランティア養成講座からスタートしたボランティアの皆さんです。当日は当センター4階に受付カウンターを設置し、お客様の学習情報などの質問にお答えしました。「知識や人に対しても受け身ではなく積極的な姿勢が必要だと分かりました。」とボランティアさんの声です。情報の蓄積や整理、見せ方などこれからの活躍が楽しみです。



ボランティアの手作りポスター



当センターの4階受付前に学習相談コーナー開設

11月から学習情報サポーター（ボランティア）による学習相談日を設け、皆様の様々な学習に関する相談にお応えいたします。ぜひこの機会に足をお運びください。

12月の相談日

10日(金)・16日(木) 13:30~15:30

ステージボランティア

こちら養成講座からスタートしたボランティア活動です。サークルフェアの2日間、会場の受付、整理、ステージの準備、司会、ビデオ撮影、出演者の誘導など大忙しでした。司会担当の方から「失敗もありましたが、やり遂げた満足感がありました。」とよろこびの声をいただきました。今後様々なスキルアップや経験を積み、他の施設での活動や、イベントの企画などにも参加していくことが目標です。



足立区生涯学習センターでは、今号でお知らせした「傾聴ボランティア入門講座」など地域に役立つボランティア養成や活動場所づくりに努めています。何かしたいけど何をしたら…と思案されている方、当センターのボランティア養成講座にぜひご参加ください。

またお持ちになっている特技や知識など活用したいと思っている方も、ぜひ当センターにご相談ください。

電話03-5813-3730 担当 鈴木・鳥塚

屏風やふすまに「芸術」を再現する経師の仕事。 父から娘へ受け継がれる匠のわざ。



小野表具店ご主人 小野 滋嗣さん
娘の彰子さん

経師というのは表具師とも言われ、屏風やふすまに絵画や書などの芸術品を表装する職人のこと。今回紹介する小野^{しげじ}滋嗣さんは、皇居東宮御所や92年のセビリア万博の屏風・ふすまなどを手がけ、足立区千住大川町で小野表具店を営んでいます。経師という伝統ある仕事を今に受け継ぐ小野さんに話を聞きました。

小野さんは家が江戸時代から5代も続いた経師だったため、子供の頃からふすまの下張りを手伝ったりしていたそうです。高校へ進学という時、偶然にも自分が養子だったことを知り、この家に来たのは運命だと思い、進学を断念して後を継ぐことを決意したとのこと。経師の仕事というのは、見た目の仕上がりは一緒でも工程はその経師の家によって独特のやり方があり、何回も下張りをしながら強度を強め仕上げていくもの。最後の仕上げは決して失敗が許されない仕事であり、目の肥えた人が見ても「よくできているね」というものでないといけなくてシビアなものだそうです。経師としての面白味は、絵でも書でも屏風やふすまの上に思いのままに仕上げられることだといいます。

小野さんは経師として幾つも大きな仕事をされていますが、中でも忘れられないのが92年のセビリア万博の日本館の仕事だそうです。安土桃山時代の絢爛たる絵画を平山郁夫画伯らの手により再現しようというもので、構想から実現まで膨大な月日がかかり、50歳というちょうど脂の乗り切った時期だった小野さんでしたが、気の遠くなるような時間と根気を要したとのこと。

皇居東宮御所は、現在の天皇が皇太子だった昭和34年頃から屏風やふすま張りの仕事を引き受けており、その仕事ぶりが認められ、今も定期的に仕事を依頼されているそうです。また約20年ほど前にはダライ・ラマに進呈する金箔の屏風を依頼され製作すると大変喜ばれ、お返しとして立派な石像と戒名までもいただいたとか。

小野さんには1男2女のお子さんがいますが、次女である彰子さんが後を継がれるそうです。彰子さんはもともと絵を描いたり工作したりするのが好きで、青山学院の短大で絵を専攻。卒業時になって、このような伝統的な職業で、しかもすぐそばに師匠がいる環境というのはなかなかないと、経師になることを決意したとか。経師の仕事は、修行からひとり立ちまで約10年。彰子さんは短大卒業後、2年ほど東京都の経師工の訓練を受け、その修了時の作品では会長賞もいただいたそうです。現在では自分の作品を料理店に飾ってもらったり、女性ならではの視点で着物をはり込んだユニークな小袖屏風を作るなど、着々と仕事の幅を広げています。ご本人に聞くと、「ひとつのものを自分で手がけることができ、それが伝統を受け継ぐもので、しかもお客さんからも喜んでもらえるのが嬉しい」とのこと。大変なのは、覚えることが多すぎるのだそうです。

小野さんは、地元の慈眼寺でふすまを手がけ、また千住本氷川神社の評議員を務めるなどの活躍もされています。後継ぎである彰子さんの成長を楽しみにしながら、今も経師の仕事ひとつひとつに力を注いでいます。



彰子さんが作った「小袖屏風」。親から子へと受け継がれた振袖の一部を使い、女性の感性が発揮された新しい形の屏風。



仕事場での様子。まだまだ一人前になるには5、6年かかると、やさしそうに語る父親であり師匠でもある滋嗣さんの姿が印象的。



千住1丁目にある慈眼寺のふすま。金箔の細工が施され落ち着いた雰囲気を出している。高度な技術がなければできない仕事。

人の力を引き出すおせっかい。 NPO法人 ぷらちなくらぶは 足立の「三丁目の夕日」を目指します。



NPO法人 ぷらちなくらぶ
理事長 大竹 恵美子さん

千代田線北綾瀬駅を降りて5分程のところにある「子育てサロンぷらちなぱーく」。訪れると、ほっとする気持ちになるのは私だけではなかったようです。手作りのおもちゃや飾り付け、温かなスタッフのみなさんに見守られ子どもたちが伸び伸びと遊んでいました。

こちらの子育てサロンを運営しているのは「NPO法人 ぷらちなくらぶ」。平成12年3月に任意団体として出発し、翌年の12月には法人格を取得、今は子育て、介護など、高齢者、障がい者、幼児に焦点を当てた活動をされています。

「昔から近所の子どもたちを集めて公園で遊びを企画したり、人と触れ合うことを楽しんでいました。」と話してくださったのは、理事長でもあり、設立者でもある大竹恵美子さん。

他区で活動されていた大竹さんが足立区に越してきたのは平成7年。阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件など暗いニュースが飛び交っていた年でした。「足立区でもできることを。」という思いから、ヘルパー講習会に参加し休み時間にお互いが感じている福祉の話で盛り上がったことが活動のきっかけでした。「生活者としてできる地に足の着いた支援がしたい。沢山の資金をかけなくても、身近な人の力を活かして助け合いができる。」そのことを実践されてきました。

法人の設立計画当時から「様々な人や社会の仕組みと関わりながら心の力をキラキラさせるサロン『三丁目の夕日構想』」を抱いて活動されてきました。「子

育て中の親子が地域の人や民間企業との連携によってソワソワ・ワクワク・ドキドキしながらキラキラと輝くサロン運営を。」と事業提案し、今では「地域人材連携サロン」として区の採択を受け、昨年8月に「子育てサロン ぷらちなぱーく」(足立区谷中)、12月には「ハートアイランド新田四番街キッズルーム」(新田)をオープンされています。昨年9月からは、介護サービスを提供する施設として「小規模多機能ホーム スマイルぷらちな」(綾瀬)も運営されています。

「ぷらちなぱーく」運営リーダーの河津さんは「お母さん同士の情報交換の場にもなっていて、子育ての相談窓口が分からない方も安心して帰ってもらえることが嬉しいです。」と話してくれました。子どもの一時的預かりだけでなく、親同士の交流、また子育ての悩みや疑問をサポートできる場としての機能もある「ぷらちなぱーく」。さらに、ママさん講師によるフラダンス、ハンドトリートメントといった企画、スタッフによるお正月遊び、わらべうたあそびなどのプログラムも行われています。

「私も含めて1人1人が出来ることは意外とたくさんあるんですね。『子どもがいる場』で集まった人の力を引き出すことが、私たちの役目です。」と事務局の小谷さん。

お話から『三丁目の夕日構想』のひとつコマを見ることができました。

おせっかいに似た人の思いやりの力を引き出す、地域の力こぶがここにありました。



「ぷらちなぱーく」は昨年8月にオープンした親子のコミュニティサロン。商店街、高齢者、障がい者の方とのイベントなど地域の方との企画も開催予定。



昨年12月にオープンした新田キッズルームでのひとつコマ。ママさん講師によるネイル、プチエステが開催されていた。



サロンを利用する子どもたち。遊ぶおもちゃは、スタッフが考えて作った手作りのもの。「物がなくても今あることで出来ることがある。」理事長の大竹さんの想いがここにも表現されていた。

昭和を思わせる懐かしい味と風情。 北千住名物の手作り飴を守り続けて 80 年。



石黒のあめのご主人
増田裕さん

北千住駅西口、宿場町通りをずっと進んで、ちょうど真ん中あたりで交差する道を日光街道に向かって曲がると、北千住サンロード商店街がある。そこを2、3分歩いて行くと左側に見えるのが石黒のあめだ。昭和の面影をとどめる佇まい、看板の“石黒のあめ”という文字もどこか郷愁を誘う。店頭には格子状の木製のケースにさまざまな色の飴が綺麗に並ぶ。目を閉じると一瞬、昭和30年代にタイム・スリップしたかのような気分になる。頬っぺたを赤くした子供たちが小銭を手に持って、走って飴を買いに来る光景・・・が思わず浮かんでくる。そんな懐かしい風情にあふれた石黒のあめのご主人、増田裕さんにお店の話、北千住の話がうかがった。

お店を始めたのは昭和8年というから、今から約80年前。尾張生まれだった増田さんのお父さんがすでに飴屋を開いていたお兄さんを頼り上京し、そこで修行したのちに、北千住の駅前通りにお店を開く。当時の写真を見せていただくと、Owariya Candy Storeという看板もあり、ハイカラな造り。当時石黒のあめは東京周辺に30数軒もあり、なかなか人気があったようだ。お店は戦争のさなか、空襲による延焼を防ぐため強制疎開させられ、一時店をたたみ草加に引越し。終戦になり再び北千住に戻り、現在の場所でお店を再開したという。増田さんは終戦直後にはわずか5歳で、おぼろげな記憶しかないようだが、高校を卒業すると父のもとで飴作りの修行に励み、やがて跡を継ぐことになったそうだ。

石黒のあめの魅力は、なんとといっても手作り。

天然の材料をもとに丹念に作り、タコ糸を使って切る。現在ではほとんどの飴が機械で作られる中、石黒のあめは創業当時とたいして変わらぬ製法であり、手作りによる飴は機械で作った飴と違って、なんともやさしい味がする。一年365日、朝から飴作りに励んでいる増田さんによれば、飴作りの敵はなんとと言っても湿気。梅雨から夏にかけては湿気のせいで飴がとけやすく、味にまで影響がでるといふ。秋から冬にかけての方が、どうしても味がよくなってしまいうさだ。

今は昔とは比べて飴の品数も増え、ココアやシソ味まで含め25種類もあるそうだが、やはりいちばん人気は、昔ながらの黒飴、ニッキ、そしてキナコ。取材の合い間にも、お客様が「黒飴を200gちょうだい！」と買いに来て、増田さんは奥にある量りで素早くはかって袋に詰めて渡す。昔ながらの量り売りが、このお店の基本。お客は、地元の人が半分、電車か車に乗って買いに来る人が半分で、埼玉、神奈川といった近県ばかりか、中にはわざわざ青森などの遠方からはるばる買いに来る人もいそうだ。

お店は増田さんと妹さんのお二人で切り盛りしているが、残念なことにはこの味を受け継ぐ人はいないという。北千住のことを聞くと、「個人商店が少なくなったなあ」とポツリ。店主としてばかりか、サンロード商店街の会長としても長年活躍されている増田さん。下町らしい風情のお店が少なくなる中、石黒のあめは昔ながらの手作りの飴、北千住名物として知られる味を作り続けていただきたいものだ。



昭和8年、創業当時の石黒のあめ。



昭和20年代半ばからサンロード商店街の中央で再開した、石黒のあめ。店の横の作業場では、朝から増田さんが飴作りに励んでいる。



色とりどりの手作り飴。人気の黒飴、ニッキ、キナコに、ココアやシソ味など新しく開発した飴も好評。100g単位の量り売りで買える。

北千住の新しい一面、キャンパスタウン。 学生と地元の人々を結びつける場所 それが、カフェしゃべり場。



店長の森本麗子(写真左)さんと
頼もしいサポーターの田内千枝子(写真右)さん

下町の情緒が色濃く残る街、北千住。いまこの街が未来に向けて大きく進化しようとしている。東京藝術大学、東京未来大学、帝京科学大学、放送大学に加えて、平成24年には東京電機大学の東京千住キャンパスが北千住駅東口に誕生。北千住の新しい一面が、キャンパスタウンとしての顔だ。そんな中、昔ながらの街の風情に、新しい息吹を吹き込もうという試みが、千住大門(おおもん)商店街に今年の1月にオープンした「カフェしゃべり場」である。

昨年4月に帝京科学大学の千住キャンパスが桜木3丁目に開設されて以来、千住大門商店街は学生の通学路として利用されており、「カフェしゃべり場」は学生の方々と地元とを結ぶくつろぎの場として誕生した。下町らしい活気にあふれた商店街にひととき目立つ洒落た外観。ドアを開けると、店長である森本麗子さんがやさしい笑顔で迎えてくれる。芳醇なコーヒーの香りが漂い、ゆったりと時間が流れる落ち着いた空間。メニューを見ると、こだわりのコーヒーがなんと300円で、学生なら200円という手軽さ。多彩なメニューの中には、各種の飲み物や手作りケーキなどに交じって、味噌汁がついたおにぎりセットやお弁当といった庶民的で栄養満点のメニューまである。さらにこの商店街で買った食べ物(メンチカツ、カラ揚げ、寿司、パン・・・など)なら、持込み自由というのもうれしい点である。

店長の森本さんはもともとこの街にある評判の和菓子屋、喜田家で働いていた経験ももち、その後ロンドンへ留学し、帰国後はコーヒー・ショップで修

行したりという豊富なキャリアを持つ。そんなキャリアと人柄に白羽の矢が立てられ、店長に。またこの店には、近くのお菓子屋の女将である田内千枝子さんが忙しい時には手伝ってくれたり、森本さんの相談に気軽に乗ってくれる頼もしいサポーターとして活躍している。

千住大門商店街は、日光街道を越えて墨堤通りの手前、千住龍田町にあり、駅からはそれほど近いロケーション。以前、都電(21系統)が上野駅から千住四丁目まで走っていた頃には大にぎわいだったが、都電が廃止となり、北千住駅前に駅ビルができてきたりして様変わり。そんな中、ちょうど帝京科学大学が新設されたのを機に、千住大門商店街を活性化させるなにかいい手はないかと、千住大門商店街の理事長でもある喜田家のオーナーの田口恵美子さんを中心にアイデアが練られたのだった。

まず最初に始めたのが、商店街のさまざまな店先に「帝京カフェ」というのぼりがかかげ、自由に使えるテーブルと椅子を置いたこと。これにより大学生に気軽に商店街を利用してもらえるようになった。そして次の一手が、この「カフェしゃべり場」だ。ちょうど店じまいしたばかりのコーヒーショップに目をつけ、足立区から「空き店舗」対策の助成金を受けて、カフェはオープン。その甲斐あって、コーヒーを何杯もお代わりしてずっとここでくつろぐ学生さんが現れたり、地元の方々の多くが常連として毎日のように訪れたり。地域を元気にさせる試みは、いま着実に実を結びはじめていようだ。



栄養たっぷり、ボリューム満点で、しかもあったかい味噌汁付きで、なんと500円の手作り弁当(写真左) 大門商店街の店先に掲げられた大学生歓迎!の「帝京カフェ」ののぼり。



いつも笑顔でやさしい森本店長。午後の忙しいさなか、お客様の声にテキパキと応えながら丁寧にコーヒーを淹れてくれる。



千住大門商店街にある「カフェしゃべり場」。千住龍田町17-10。月～金は8～19時、土は10～19時営業。日祝休み。

今回の地域のちからコブは、足立区生涯学習センターで「大学生による東日本大震災被災者支援 ワンコインチャ

開催された東日本大震災被災者支援事業の「一日ゆったりふれあい広場」とリチャージジャズコンサート」で活動された方々のご報告です。

86名のボランティアが大活躍。
5月22日(日)
「一日ゆったり ふれあい広場」で大活躍。

地元の高校生、大学生を中心に、総勢 86 名ものボランティアの方々が参加。3B 体操、ミニゲーム、楽しいお土産づくり等では、元気いっぱい遊ぶ子どもたちのお姉さん・お兄さん役として、ボサノバ・ミニコンサートでは司会として活躍。保育サロン、一時預かりでは、幼児のための読み聞かせに励んでいました。動物の着ぐるみをかぶり汗びしょりになって、入場案内・勧誘をしてくれた方もいました。1階入り口から4階の講堂、ホワイエ、さらに5階の研修室まで、館内いたるところで若いパワーを発揮し盛り上げてくれました。ボランティアの皆さん、大変お疲れさまでした。



1階ロビーでプログラムを配布。



エントランスではフラフープやバターゴルフ、缶ぽっくりで子どもたちと楽しく遊びました。



保育室では少しだけ緊張気味。



針金で作るアメンボや勾玉づくりなどでは、そばでアドバイスや応援を送っていました。



自分たちで描いたイラストが楽しいふれあい広場のポスターを1階ロビーにディスプレイ。



会場での募金活動でちいさなお客様からも寄付も。



講堂中での「輪になって遊ぼう」では、イス取りゲーム、ハンカチ落としなどで、子どもたちと一緒にいい汗をかきました。



3B体操など有料イベントでは受付でも活躍



コンサートの最後は4大学によるジャムセッションでジョージ・ガーシュインのアイガットリズムを演奏、会場から盛大な拍手をいただきました。



東京電機大学神田キャンパス文化部会モダンジャズ研究会



千葉大学モダンジャズ研究会



法政大学ジャズ研究会



獨協大学モダンジャズ研究会

4大学が共演！若い力で元気を発信！
5月28日(土)
大学生によるチャリティージャズコンサート

東京電機大学、千葉大学、獨協大学、法政大学のジャズ研究会が、震災の被災者支援のため生涯学習センターに集まってくれました。コンサートの司会も現役の大学生、若い力で会場を盛り上げてくれました。当日は朝から雨でしたが、83名のご来場をいただき、若い出演者に温かな拍手を送っていました。「若い力に勝るものはない。プロと違う学生の一生懸命さを感じた」と好評でした。この震災で実家やクラブハウスが被災した大学生の話に、会場から逆に励ましの声がかかるほど、演奏者と会場が一体となった温かなコンサートになりました。出演した大学生の想いと、ご来場いただきました皆様のお気持ちをしっかりと被災地、被災者にお届けいたします。



司会：竹内 友理さん
6月の若者チャレンジ事業「中国プチ旅行のための中文講座」で講師に挑戦しています。

東日本大震災被災者支援・5月事業のご報告

- 吹き流し寄せ書き
メッセージ
メッセージ:1,190通
吹き流し:17本
 - 一日ゆったりふれあい広場
来場者:648名
義援金:21,012円
 - 大学生によるワンコイン
チャリティージャズコンサート
来場者:83名
義援金:38,800円
- 多くの方のご支援、ご協力ありがとうございました。

ちゅうせん
**伝統技法の注染に、若い職人の手で
新しい流れを作っていきます。**



旭染工株式会社 代表取締役
阿部晴吉さん

創業は昭和30年、当時は綾瀬川で泳いだりしました。

バス通りから路地を入ってすぐ、目の前に大きな干し台が現れ、色とりどりの長い布が風に揺れていました。花畑の綾瀬川のほとりで、伝統工芸品に指定されている東京本染手拭を製造している旭染工株式会社にお邪魔し、代表取締役の阿部晴吉さんにお話を伺いました。旭染工の創業は昭和30年、もともと染工場であった土地建物を晴吉さんの父、染職人の晴司さんが購入したのが始まりです。周りは田んぼや畑、そばを流れる綾瀬川は、とてもきれいで、染物の洗いなどをしていました。日本橋の間屋からも近く、当時、周りには何軒かの本染工場がありましたが、今では都内に5～6軒だそうです。

注染という技法は明治の中頃から始まりました。

東京本染は注染という技法を用います。染めない部分や他と色を変える部分を防染糊で覆ったり、囲ったりしながら長い生地を折り返し、作業を繰り返します。20～40枚分重ねた生地に、注ぎ口の細い薬缶で上から染料を注いでいきます。また一か所に2色以上の染料を注ぐと“ぼかし染”ができます。何層にも重ねた生地を一度に染めるため、下から減圧し染料を下まで行きわたらせます。生地を裏返し同じ作業をするため裏表しっかり染まり、味わい深い本染浴衣や本染手拭が染め上がります。この防染糊の型付や染めの職人になるには、最低でも5～6年の修業が必要とのことでした。

社員は25人、未来の匠達が黙々と働いていました。

仕事柄、年配の方が多いのかと思いましたが、最近では若い方が多く、伝統の技を引き継いでいます。創業当時は浴衣が中心でした。浴衣は季節商品で冬、春の間に染め上げます。そこで新潟の豪雪地帯からの季節労働者が染の仕事をしていました。しかし近年、浴衣の柄は派手になり、短期的なファッションとして、安価なプリント物が主流になりました。そこで本染の仕事は手拭が8割になりましたが、季節に関係なく製作されるため、以前と違い安定的な雇用の場となり、手に職をつけようとする近隣の若い人が集まるようになったそうです。

これからの旭染工の仕事は多種多様で、より精度の高い染色です。

日本手拭も昔と違い大変カラフルになり、デザインもモダンに。また、キャラクターをデザインしたものなどバリエーションも豊かになりました。東袋やブック

カバーなど用途も広く、和装雑貨としてお店に置かれるようになりました。趣味の多様化したお客様の声の間屋を通して入ってきます。「小ロット、多品種は染という同じものを大量に作る職場には経営的に厳しいですが、お客様の要求に精度の高い仕事で応えていこう、頑張っていきます。」と阿部さんは笑顔でおっしゃいました。3代目の晴徳さんをはじめ若い職人の力で、足立から日本の伝統工芸を広め、さらに高めていってください。



型付
型紙を枠に貼り、型台の上に伸ばした生地の上に防染糊をへらで付けていきます。年季のいる仕事です。



染色
防染糊で囲った部分に染料を注ぎます。足元のペダルを踏むとコンプレッサーで減圧され、染料が下の生地までいきわたります。



仕上げ
乾いた手拭の布地を、地巻きし手拭の長さにしたみなおして、ロール機をかけシワをとります。



ぼかし染め
防染糊で囲まれた部分に、何色かの染料を注ぎます。職人の技の見どころです。

**足立区生涯学習センターで活動する
様々な分野のボランティアの皆さんが
集まり交流を深めました。**



足立区生涯学習センターでは、3つの重要な取組みとして『サークルフェア』『若者支援事業』と並んで『ボランティア事業』に取り組んでいます。その一環として、生涯学習センターで活動しているボランティアの皆さんが集まり、去る7月17日(日)にボランティア全体交流会を開催いたしました。

この『ボランティア事業』では、学びの場が実践の場につながり、さらにスキルアップの場へとつながる、そしてその活動が当センターから地域へとひろがり、地域のカコブとして、地域の魅力や元気づくりとして発展していくよう、取り組んでいる事業です。

22年度はステージボランティア、学習情報サポーター、傾聴ボランティア、保育室運営ボランティアの4つの入門セミナーを開催し、受講生でセミナー終了後の活動に手を挙げてくださった方を中心にグループを立ち上げ、さまざまな実践の場へと活動をはじめてきましたが、その一方で、職員においてもボランティアにおいても事業や活動における方向性や認識に温度差があり、さまざまな対応の違いが生じる場面も見られました。

今回のボランティア全体交流会は、この『ボランティア事業』における本格的なスタートとして、お互いの活動を知り、交流を深める機会として、また当センターにおける同事業の方向性や位置づけをお知らせする機会と

して開催したものです。

ボランティアメンバーの参加者は10名でしたが、周知期間が短かったにも関わらず、全ての分野のグループから参加があり、一部の活動については職員に加えて、ボランティアメンバーが紹介していました。また、区からも3名の方の参加がありました。

初めての全体交流会であり、お互いの交流を深めるといふより、それぞれの活動紹介に終始した面も否めませんが、全体交流会終了後の有志による懇親会では、お互いに会話に花が咲き様々な交流をすることができました。

今回の全体交流会を通して、ボランティア事業の位置づけや方向性、各ボランティアグループの活動や方向性について、職員、ボランティアともに認識を深め、新たなスタートを切ることができたと考えています。

23年度はガーデニングボランティア入門セミナー、コミュニティアートボランティア入門セミナーを開催し活動を始めています。また、広報ボランティア入門セミナーの開催も予定しています。

職員とボランティアメンバーとが一緒になって、社会教育施設とボランティア活動、地域とボランティア活動について考え、協議しながら新たな地域のカコブとなるよう具体的な活動を進めていきたいと考えています。皆様のご参加を心よりお待ちしております。



▲ボランティア事業の方向性と位置づけの発表

各担当職員によるボランティアグループの活動紹介と方向性の決意発表と質疑応答



懇親会
ボランティア全体交流会終了後、7階レストランさくらにおいて懇親会を開催。飲んだり食べたりすることで、一層話に花が咲き、楽しい交流の場となりました。



子どもが最初に履く靴を、一生の記念に。 夫婦二人三脚で作上げた「足立ブランド」

小さな子どもがヨチヨチ歩きから、やがて自分のチカラで立ち上がり、初めて歩き出す瞬間ほど感動するシーンはありません。元気に歩き始める子どもにステキな靴を履かせたい……。そんな親の想いをこめて作り上げた、本革のベビーシューズ。このベビーシューズ作りを新たなビジネスとして立ち上げ成功させた、ファーストステップシューズの経営者である町田さんご夫婦にお話をうかがいました。

町田洋子さんがベビーシューズを作り始めたのは今から12年前。ちょうど11カ月になった自分の子にピッタリ合うサイズの靴がなかったことから、靴メーカーで靴の企画・デザインを手がけていた経験を活かして、自らの手で本革のベビーシューズを作ったのがキッカケでした。友人の子どもにも作ってあげたところ好評だったことから、当時出版社でWeb関連の仕事に携わっていた夫の彰秀さんが手伝って、ベビーシューズの販売をインターネットで始めました。やがて楽天で売れ出すと人気に火がつき、4年前には彰秀さんも会社を辞めて、靴工場で作製を学んだ後に、夫婦二人での経営が本格的にスタートしたのでした。

ベビーシューズが大人の靴と違うのは、革がやわらかくて薄いこと。革のベビーシューズを作るメーカーがなく、当初は材料選びから作り方まで一から考えねばならず大変だったそうです。販売は全てインターネットで行い、店頭での販売はなし。靴は手作りキットにより、お客様が自分の子どもに合ったサイズ、デザイン、色柄を選び、オーダーメイド感覚で注文でき、お客様が自分で作る楽しさを感じられるのが大きな特徴です。品物は約2週間でお客様の手元に届くそうです。



ファーストステップシューズの経営者、町田さんご夫婦
<http://1ststepshoes.com>

靴の寿命は合皮だと10年が限界ですが、本革の靴はきちんと保管すれば、履いた時のままでずっと維持することができ、子どもが歩き始めた記念として、一生の思い出にすることが出来るのが魅力。最近ではネーム入りサービスも開始。注文は全国から届き、北海道、四国、九州といった遠方からも多いとか。福岡のある結婚式場では新郎から新婦へのサプライズプレゼントに採用され、喜ばれているそうです。

店頭販売でないため、ふだんはお客様に会うチャンスがありませんが、ベビーシューズ作りの講習会を開催しており、そこからお客様の声がかかるようになったとのこと。その意見を基に手作りキットの説明書を改善したり、人気の高いデザインの材料を多めに仕入れるなど、サービスを向上させています。

元々革産業が盛んだった足立区ですが、時代とともに衰退、職人も減り続ける中、本革ベビーシューズキットの製造・販売を新たなビジネスモデルとして成功させた町田さんご夫婦。10年間の努力の結果、ファーストステップシューズは、足立区から「足立ブランド」に認定されました。お二人が次のステップとして考えているのが、ギフトショーへの出展などを通じ知り合った足立の仲間とワークショップを開くこと。「地域での交流が仕事そして足立区の産業の活性化につながるように、皆で活動していきたい」と語っています。

足立区には町田さんご夫婦のように新たなものづくりを元気に行う「地域の力」が数多く存在しています。そんな方々が手を組めば、ますます頼もしい力となって、足立区から日本全国へ、そして世界へ、力強い発信をしていけるようになると思います。



縫製は、ベビーシューズ作りで一番神経を使う仕事。一つ一つ丁寧に仕上げられています。



サイズ、デザイン、色柄まで種類豊富。お好みの手作りキットをオーダーできます。



手作りキットの説明書。わかりやすくするため、細かい箇所まで何度も修正を加えています。

足立区から太極拳で 未来のオリンピック選手の卵たちが 飛び出そうとしています。

あだちサークルフェア2011、10月9日のステージをご覧になった皆さん、覚えていますか。龍芳太極拳梅田の舞台の始めに、見事な演武を披露してくれた3人の子供たちを。彼らがまた素晴らしい活躍で、足立の太極拳のレベルの高さを多くの方々に示してくれました。今回の地域のちからこぶはこの3人です。白川悠君(中学2年・14歳)、大竹雅大君(小学5年・10歳)、荒川イヨさん(小学6年・11歳)と、子供たちの指導に当たっていらっしゃる大竹由美先生(日本武術太極拳連盟公認指導員 A級3段・公認審判員)にお話を伺いました。

10月30日、藤沢市の神奈川県立体育センター・スポーツアリーナで開催された「南関東ジュニア武術太極拳大会」(主催:社団法人日本武術太極拳連盟、以下連盟と表記)において白川君がジュニア太極拳2と簡化太極拳、32式太極剣の3部門で金メダル、大竹君はジュニア太極拳1で金メダル、荒川さんはジュニア太極拳1で4位と大健闘でした。この大会は関東のほぼトップレベルが集まる大会で、このときは長拳(カンフー)も含めて452人も参加があったとか。いかに3人の成績が素晴らしいかが分かります。簡単に競技を説明しますと、ジュニア太極拳は将来のオリンピック選手育成のため、連盟が考案した足技などを取り入れた子供たちが行きやすい太極拳です。18歳以下出場のジュニア太極拳1とジュニア太極拳2があるそうです。簡化太極拳は24式太極拳とも呼ばれ、伝統的な太極拳を整理し、簡易化したもので最も一般的に行われている太極拳です。32式太極剣は文字通り、剣を使った太極拳です。小学生はジュニア太極拳1と2にエントリーができます。各種目は競技時間が決められており、5人の審判員が10点満点からの減点法で成績が決まります。



左から大竹君、大竹先生、荒川さん、白川君

「2度ほどやめようと思ったことがあったけど、続けてきてよかった」(白川君)、「今まで2位が多かったけど1位になってうれしかった」(大竹君)、「メダルに届かず悔しかった」(荒川さん)と感想を語ってくれました。

今回の成績優秀者が出場できる大会が、来年4月名古屋で開かれる「第20回 JOCジュニアオリンピックカップ武術太極拳大会」で、代表選考会です。今、期待してオファーを待っているところです。この大会での成績次第では次は世界大会です。2008年の北京オリンピックでは公開競技で競われた太極拳、将来正式競技となった時は、成長した彼らがきっと世界の舞台で活躍しているでしょう。

今までに多くのジュニアを指導してきた大竹由美先生は、子供たちの礼儀はもちろんのこと、自分の気持を人に伝えるよう表現することを重視して、試合後感想文を書かせているそうです。技術だけでなく人間としても成長してほしいという指導者の願いが伝わります。小学1年で太極拳を始めたころ「将来オリンピック選手になり、おじいさんになったら太極拳のコーチになる」と話していた白川君、「サッカーも好きなんだ」と話してくれた大竹君、「ピアノも習っている」とお母さんより太極拳が上手な荒川さん、これからも太極拳を通じて足立の元気を全国に発信してください。

生涯学習センターでは、16歳以上を対象にほぼ毎週火曜日10時から「おはよう教室健康太極拳」を開催しています。当日受付です。腰痛やひざの痛み予防、集中力や精神安定に良い太極拳を、是非、体験しにいらしてください。大竹由美先生、他の講師が皆様にやさしく指導します。



左は白川君の賞状と金メダルです。



「南関東ジュニア武術太極拳大会」の表彰式と会場風景



日本の伝統芸「獅子舞」を守り 明日に繋げる“ひよっこ”たち

お正月には欠かせない「獅子舞」も、最近はあまりみかけなくなりました。昔はお正月になると神社から厄払いのため各家庭へ出向き、家の軒先で「獅子舞」を披露していたものでした。子ども心にも怖いもの見たさでそっと群衆の中からのぞいては驚いたり、面白がったりしたことを思い出します。今回は足立区を中心にその獅子舞を精力的に行っているボランティア団体「ひよっこ会」の太鼓担当の大野さん、笛担当の榎家さん、獅子舞担当の増田さんにお話を伺いました。

「ひよっこ」というとひょうきんなお面を思い浮かべますが、ある説によると、昔竈（かまど）の火を竹筒で吹く「火男」がなまって「ひよっこ」になったそうです。各地のお祭りで道化役として人気がある「ひよっこ」なので、それにあやかりグループの名前にしたとのこと。

「ひよっこ会」は現在5名で活動しています。世話役の大野さんは質屋さんで今は一線を退き、榎家さんは印刷関係の仕事をしていらっしゃいます。皆さんまったく繋がりはなかったのですが、子どもの頃から近くの神社でのお祭りを見て育ち、それぞれ違う拠点でお神楽や祭囃子の奏者として活動していて巡り合い、顔見知りになり親しくなったそうです。そのうち「皆で何か社会に役立つことはできないか」と考えるようになり、グループで「獅子舞」を通して、お年寄りや身寄りのない人を励ますのはどうかと考え、5年ほど前から「ひよっこ会」を結成し、一緒に活動するようになったそうです。

現在は足立区島根を拠点として月2回ほど集まって練習しています。「獅子舞」を実際に見せて頂きましたがその動きは独特で「怖さ」と「軽妙さ」を醸し出す



左から笛の榎家さん、獅子舞の増田さん、太鼓の大野さん

ため「トラ」や「ライオン」、時には「ひょう」の動きを取り入れているとのことかなり激しくアクロバチックな動きで驚きました。獅子舞を担当している増田さんは60代とは思えぬ動きで軽やかに踊っていました。

獅子舞を披露していて思い出に残っていることを伺ったところ、会の世話役の大野さんの母親の卒寿（90歳）のお祝いで、友人や親族を招いて獅子舞を披露した時の母親の喜んだ姿が忘れられないとのことでした。また、お正月には足立区内外の特養老人ホームで「獅子舞」を披露する機会が多いのですが、獅子舞をみてうれしさのあまり涙ぐむ姿や、「ありがとう」という言葉をかけられると、やっけていて本当に良かったと思うとのことでした。1月5日には東松戸にある特養老人ホーム「親愛カトレア会」で獅子舞を披露する予定です。

今、抱えている悩みは活動場所が限られている、跡を継いでくれる人がいないなどです。そこで、伝統芸である「獅子舞」を次の世代へ伝えるべく会のメンバーの榎家さんが、埼玉県川口市にて無償で毎週金曜日・中学生に獅子舞や御神楽、お囃子などを教えています。現在は15～16名の子どもたちが練習しています。日本の伝統芸「獅子舞」を守り、さらに次の世代の若獅子を育てるため、地域のちからこぶとして、いつまでも元気に踊り続けてください。

お知らせです。生涯学習センターでは1月14日（土）新春イベント「日本の正月をみんなで楽しもう！」を開催。会場では今回ご紹介した「ひよっこ会」による獅子舞の実演と体験会が行われます。この機会に獅子舞を体験してみたい方はいかがでしょうか。（P.5掲載）



特養老人ホームにて獅子舞を披露する「ひよっこ会」



柔軟な体の増田さんならではの演技です。



3人の息のあった獅子舞を披露していただきました。

ネギ一筋 “伝統×新風”に情熱を傾ける 達人のこだわりとぬくもり

みなさんは「葱商」という言葉をご存知だろうか？ネギ専門の仲買人のことで、“ネギの目利き、ソムリエ”ともいえる。

千住河原町にはネギ専門の珍しい市場があり、ネギ農家が丹精こめて育て納得したネギだけが集まってくる。それを葱商が競り落とし、料亭や蕎麦屋、焼き鳥屋など関東一円に業務用として届けているのだ。つまりネギ農家が誇りとするネギをさらにプロが目利きし、こだわりを持った店がそれを買うことになる。この千住の市場を通ったネギだけが「千寿葱」というブランド名で呼ばれ、江戸時代から200年以上続く伝統野菜として、今も日本の食文化を担っている。今回は、その千寿葱を扱う葱商「葱茂」さんを訪ねた。

社長の安藤賢治さんは、戦後父親が始めた葱商を受け継ぎ千寿葱だけを扱って40年以上、3代目となる息子の将信さんも専務として活躍、その舞台をしっかり支えているのが社長の奥様だ。いただいた名刺の「ネギ一筋」という文字に、千寿葱を扱う誇りとプロとしての確かな目を感じられる。

葱商は世襲で、新規で加わる場合はどこかの葱商で10年以上修行する。ネギをみる確かな目がないと千寿葱の信用にかかわるからだ。また朝6時半からのセリに始まり、配達や発送作業などと夕方まで続く体力的にも大変な仕事だ。

「ネギを見たらどの農家かわかる」「キメとつやで味がわかる」「ネギによって根の張り方が違う」等々、その話し振りに千寿葱にかける愛情とこだわりがあふれている。「体感、食感が大切」と差し出されたネ



左から将信さん、奥様の育子さん、社長の安藤賢治

ギは太くてずっしりと重い。その切り口をなめてみるとみずみずしく甘い。千寿葱は水分が多く、糖度は14度以上でメロンと同じだそうだ。次にガブリ！シャキッとしたネギの香りと辛みが広がる。ネギ嫌いの子どもが葱茂さんのネギを「おいしい」といって食べるのも頷ける。

その一方で農家の後継者不足、こだわりを持つ料理人の減少や老舗の代替わりなど千寿葱を取り巻く環境は厳しい。その将来を見据え、将信さんはインターネットやスーパーでの小売販売、チラシによるPRや千寿葱を使った新商品開発など新たな取組みに力を入れている。伝統を守りつつ千寿葱の世界に新風を興し、将来に繋げていこうとしている“地域の力こぶ”葱茂さん。千寿葱に傾ける情熱だけでなく、千住のまちや足立区にかける想いも熱い。その熱い想いが着実に広がり、「ねぎみそせんべい」や「千寿ネギピクルス」など新たな地域ブランド商品が生まれている。



千寿ねぎみそせんべい



千寿ネギピクルス

ちなみに葱茂さんおすすめの食べ方は「てんぷら」、「ジャコとのかき揚げ」、「ホイル焼き」。皆さんもお試しあれ！



「千寿葱」のラベルには“葱一筋、江戸の昔より二〇〇余年”の文字が…



ネギ生産者は昔からの屋号で呼ばれています。ネギを見ただけで生産者が分かるそうです。



取り扱うネギは新鮮、切っていたと汁が滴ります。



伝統を守りながらも「千寿ねぎみそせんべい」など新しい試みに挑戦。

昭和の時代からタイムスリップしたようなセルロイド人形。今も足立で活躍する日本でただ一人のセルロイド職人。

ベーゴマ、メンコ、ダッコちゃん・・・。映画『ALWAYS 三丁目の夕日』の中にでも出てきそうな昭和のおもちゃ。そんなおもちゃの中で女性が懐かしく感じるのがセルロイド人形です。今ではすっかり見ることがなくなったこの人形を復活させ、注目を集めているのが「ミーコ」人形。これを製作しているのが足立区辰沼にある平井玩具製作所です。その社長である平井英一さんにお話をうかがいました。

平井さんのおじいさんとお父さんの親子がセルロイドのおもちゃ作りを始めたのが、終戦後まもない昭和 22 年のこと。その頃、平井さん一家が住んでいた葛飾区四つ木はセルロイドの町といわれ、工場が数えきれないほどあったそうです。平井さんの工場でも人形から漫画のヒーローのお面、ピンポン玉などさまざまなセルロイドのおもちゃを日夜製作しており、大忙し。小学生だった平井さんもおもちゃ作りをよく手伝ったとか。当時はセルロイド人形が大人気で、南米などの海外にも輸出され、昭和 34 年ごろまでは好景が続いたそうです。そんな状況を一変させたのが、プラスチックのおもちゃの登場。セルロイドは燃えやすいという欠点もあり、おもちゃの主役の座は一気にプラスチックに奪われてしまいました。それからはセルロイドが脚光を浴びることはなく、正月の飾りに使われるぐらいで、平井さんも細々とセルロイド製作を続けていたそうです。

ところが今から 15、16 年ほど前に、おもちゃコレクターとして有名な北原照久さんのオフィスから連絡があり、セルロイドでミッキー・マウスの生誕 70 周年を記念した限定人形を作ってほしいとのこ



平井玩具製作所社長でセルロイド職人の平井英一さん
(<http://www.celluya.com>)

と。セルロイド人形の基となる金型を造ることができる職人を探し出し、人形作りもいろいろと苦労しながら、昔ながらのミッキーを完成させることができたそうです。これをキッカケに、素朴な味わいをもったセルロイド人形の魅力を平井さん自身も再認識し、平井さんのもとにひとつだけ残っていた人形の金型を使って再び人形を作り始めました。その人形が「ミーコ」で、50 年前の金型を使って、成型、彩色、組立といった一連の製造工程はすべて平井さん一人で手作り。これをインターネットで販売し始めたところ、40 代の女性を中心に注文がくるようになり、またインターネットを通して秋田に住む方にミーコの洋服作りをお願いするようになったことから、ミーコのラインナップが一気にバラエティ豊かに広がりました。

平井さんは人形作りに励むかたわら、近年では人形のイベントに出展し、また足立区郷土博物館や「あだち区民まつり A フェスタ 2011」で携帯ストラップとしてつけるミニチュア・キューピーのペイント大会をやり好評を博しています。最近では足立区制 80 周年を祝う蜂のコスチュームを着たミーコ人形 10 体（ハチ・ジュウ！）を作り、4 月には舎人公園のイベントにも参加するそうです。

日本でただ一人のセルロイド職人、平井さんは、「ミーコ」人形を通じて、昭和を懐かしむ人には古き佳き時代を思い出していただき、またイベントに来てくれる子どもたちには手作りのおもちゃならではの良さ、魅力をもっともっと知ってほしい、と淡々と語っていました。



懐かしさにあふれるミーコ人形。目の色・大きさ、髪の色、服などが変わると、驚くほどイメージが変わってくる。



平井さんの仕事場にあふれるミーコ人形の数々。ひとつひとつの人形がなにか遠い時代から語りかけてくるようだ。



人形の成型、彩色、組立、さらにお客様への発送、ホームページ作りまで、すべて平井さん一人でやっている。



平井さんの家にひとつだけ残されていた、50 年前の金型を基にミーコ人形は作られている。



編集後記

“地域のちからコブ” は、生涯学習センターの職員がほぼ毎月かわるがわる担当、取材先を探し、写真を撮り、記事を書き、掲載してきました。文章を書くのは学生の頃以来という人もおり、はたして足立区で活躍されている人々や企業の魅力、どこまでお伝えできたか不安もありました。しかし“継続は力”という言葉が唯一の支えとして、少しずつですが回を追うごとに、地域の力に感動した取材者の気持ちを表現できるようになってきたのではと、厚顔を承知で感じています。

今後とも“地域のちからコブ”を通して足立区のまちづくり、地域の絆づくりに活躍する区民の方々の魅力を発信していきます。ぜひご愛読をお願いいたします。

尚、皆様のお暮しになっている地域に“地域のちからコブ”で紹介したい方や団体、企業がございましたら生涯学習センター事業部まで情報をお知らせください。より充実した“地域のちからコブ”にしていきたいと思っております。ご協力をお願いいたします。

最後に、この冊子を作るにあたり、足立区生涯学習センターの広報ボランティアの瀧澤さん、武井さんにご協力いただきました。この場をかりてお礼申し上げます。



2012 年 10 月
ピア・ナビ編集担当 鳥塚

平成 24 年 10 月 13 日発行

編集・制作 足立区生涯学習センター
指定管理者：ヤオキン・ジョンソンコントロールズ共同事業体
東京都足立区千住五丁目 13-5 学びピア 21 内
電話 03-5813-3730 E-mail:gs@kousya.jp





足立区生涯学習センター

指定管理者：ヤオキン ジョンソンコントロールズ共同事業体

〒120-0034 東京都足立区千住五丁目 13-5 学びピア 21 内

電話 03-5813-3730 E-mail:gs@kousya.jp